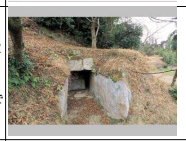
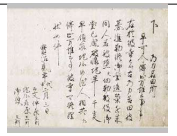
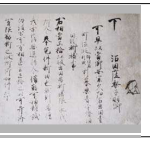
| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 重要文化財（建造物） | 佛通寺含暉院地蔵堂<br>附　須弥壇　1基 | ぶっつうじがんきいんじぞうどう | 1棟 | 三原市高坂町許山 | 昭24.2.18 | 桁行三間，梁間三間，一重，宝形造，本瓦葺 | | 佛通寺は応永4年（1397）に小早川春平が愚中周及（ぐちゅうしゅうきゅう）を迎えて開いた臨済宗の大寺である。その後，火災が相次ぎ，創建当時の建物は今では禅師の塔所含暉院だけとなった。<br>地蔵堂は応永13年（1406）の建築で，内部に純禅宗様のすこぶる優秀な須弥壇（しゅみだん）を持つ，小規模な禅宗様の仏殿である。現在は内部に木造床が張り巡らされているが，もとは磚敷床（せんじきゆか）で，柱間にもかなりの変更がなされているようである。 | | |
| 国 | 重要文化財（建造物） | 宗光寺山門 | そうこうじさんもん | 1棟 | 三原市本町 | 昭28.11.14 | 四足門，切妻造，本瓦葺 | | 小早川隆景の居城である新高山城（豊田郡本郷町）内の門を移建したと伝えている。規模の大きい木割の太い四脚門で，蟇股（かえるまた）などの細部に桃山時代（16世紀末）を思わせる豪快な手法が見られる。<br>宗光寺はもとは匡真寺と言い，毛利元就が新高山城内に建立したが，後に隆景が三原城へ移った際に隆景によって三原へ移され宗光寺と称するようになったという。 | | |
| 国 | 重要文化財（建造物） | 米山寺宝篋印塔 | べいさんじほうきょういんとう | 1基 | 三原市沼田東町納所 | 昭31.6.28 | 高さ2.5m | | 沼田小早川氏の墓所の北東隅にあり，墓地内ではひときわ大きい石塔である。鎌倉時代・元応元年（1319）「大工念心」によって造られた。温雅の感があり美しい意匠であり，鎌倉時代末期（14世紀前半）の宝篋印塔の秀作である。塔身に「大工念心　元応元年己未十一月日　一結衆敬白」の刻銘がある。<br>米山寺は沼田庄地頭小早川茂平が嘉禎元年（1235）に建てた氏寺で，小早川氏歴代の墓（石造宝篋印塔20基）が立ち並ぶ。 | | |
| 国 | 重要文化財（絵画） | 絹本著色大通禅師像<br>附　紙本墨書大通禅師墨蹟1幅（丁亥四月一日トアリ）<br>紙本墨書大通禅師消息1幅（十二月十五日トアリ） | けんぽんちゃくしょくだいつうぜんじぞう | 1幅 | 三原市高坂町許山 | 明43.4.20 | 絹本著色 | 縦103cm，横41cm | 大通禅師愚中周及（ぐちゅうしゅうきゅう）は，室町時代（1333～1572）の禅僧で美濃（みの，現在の岐阜県）の人。はじめ京で夢窓疎石などについて修業したが，五山の禅風にあきたらず，中国の元（げん）に渡って金山の仏通禅師の法嗣をうけ，帰朝して五山の外にあって清新な宗風をおこし，応永16年（1409）87歳で没した。<br>この画像は禅僧の肖像画すなわち頂相（ちんぞう）であり，小早川春平が描いた像に，周及が賛を書いて修業皆伝の証としたもので，脱俗ひょう逸な禅師のすがたを目のあたりに見るようである。<br>附の墨蹟（ぼくせき）は，応永14年（1407）周及晩年の筆で「病僧周及」と署名がある。同じく附の消息は応永15年（1408）京で将軍足利義持（在任1394～1423）に教えを説いたころのものとされる。 | | |
| 国 | 重要文化財（絵画） | 絹本著色小早川隆景像<br>文禄三年ノ賛アリ | けんぽんちゃくしょくこばやかわたかかげぞう | 1幅 | 三原市沼田東町納所 | 明43.4.20 | 絹本著色，軸装 | 本絹縦104.7cm×横42.2cm | 安土桃山時代（1573～1602）の文禄3年（1594）に描かれた小早川隆景の寿像（じゅぞう）。京都大徳寺の塔頭（たっちゅう）黄梅院の玉仲が賛を記している。中啓（ちゅうけい）を持ち黒の袍（ほう）をつけて座した束帯の姿である。<br>この画を伝える米山寺（べいさんじ）は小早川氏の氏寺であった。<br><br>※寿像（じゅぞう）…生前に描かれた肖像画。<br>※小早川隆景（1533～1597）…毛利元就の三男。小早川氏の養子となり，後，毛利氏領国支配の一翼を担った。 | | |
| 国 | 重要文化財（彫刻） | 木造狛犬 | もくぞうこまいぬ | 1対 | 三原市八幡町宮内 | 大6.8.13 | 一対 | 高さ80cm | 室町時代，嘉吉年間（1441～43）の作ともいう。もとは御調八幡宮本殿に安置されていた。社伝では足利八代将軍義政の寄進と言い，かって狛犬の腹部に「嘉吉―」の墨書が見えていたと言うが，今は見えない。<br>もとは彩色されていたが，現在は剥落し，ところどころにその痕跡を残すのみである。<br>御調八幡宮は奈良時代（710～793）の勧請といわれ，京都石清水八幡宮の別宮であった。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫（0848-65-8652） |
| 国 | 重要文化財（彫刻） | 木造行道面 | もくぞうぎょうどうめん | 11面 | 三原市八幡町宮内 | 平14.6.26 | 楠材，旧は彩色あり | 獅子頭：高さ30.0cm<br>馬頭：長さ53.1cm<br>菩薩面：縦20.0～20.5cm，横21.0～22.0cm<br>比丘面：縦29.0cm，横21.0～22.0cm<br>如来面：縦33.5cm，横20.0cm | 行道（練供養，ねりくよう）とは，仏像を奉じ行列を組んで練り歩くもので，この時に使用される面が行道面である。<br>13面のうち，獅子頭と馬頭（うまがしら）は平安時代後期（12世紀），菩薩面8面及び比丘（びく）面2面は鎌倉時代前期（13世紀），如来面は室町時代（1333～1572）の作である。獅子頭と馬頭は類例希な遺例で，菩薩面及び比丘面は慶派風の上質な作である。胡粉が残っており，旧は彩色が施されていた。菩薩面の一部の冠には金泥が残っている。<br>破損は著しいが平安時代後期の作である菩薩面3面が附指定となっている。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫（0848-65-8652） |
| 国 | 重要文化財（彫刻） | 木造僧形八幡神坐像<br>木造僧形神坐像<br>木造女神坐像<br>木造天部形立像 | もくぞうそうぎょうはちまんしんざぞう，もくぞうそうぎょうしんざぞう，もくぞうにょしんざぞう，もくぞうてんぶぎょうりゅうぞう | 7躯 | 三原市八幡町宮内 | 平15.5.29 | | | 御調（みつき）八幡宮の本殿にまつられている神像である。製作時期は平安時代前期の9世紀から10世紀初めにかけてに求められ，八幡神が2神から3神へと変化していく歴史的経過を明瞭に示しながら，各時代の作がよく保存されている。仕上りの美しさや保存状態の良さもさることながら，神像の造形的変遷を如実に示す好個の作例である。 | | |
| 国 | 重要文化財（典籍） | 大般若経<br>（自弘安七年至同十年宋人謝復生一筆経） | だいはんにゃきょう | 600巻 | 三原市本町 | 昭27.3.29 | 表紙は宝相華唐草文，各巻に見返し絵。軸は鍍金撥形。紺紙金字 | 縦25.6cm，全長75.5～135cm | 鎌倉時代の弘安7年～10年（1284～1287）にかけて写された一筆大般若経である。奥書によると，宋の建康府の人謝復生が弘安7年5月から33か月余を費し，周防国楊井庄上品寺（やないのしょうじょうほんじ，山口県柳井市）において書写したことが知られる。<br>長享2年（1488）6巻が補写され，元和7年（1621）三原の八幡原元重によって正法寺へ寄進された。<br>今は折本であるが，もとは巻子本であった。<br>正法寺は真言宗仁和寺末（現，御室派）で，三原築城に際して沼田庄（沼田東町）から移された寺である。<br>一筆大般若経とは一人の人物によって写されたものをいう。 | | |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 重要文化財（歴史資料） | 阿弥陀経板木　2枚<br>　嘉禎二年自七月十六日至八月十七日開版<br>法華経普門品板木　2枚<br>　嘉禎二年自九月十八日至十一月廿二日開版<br>金剛寿命陀羅尼経板木　1枚<br>　嘉禎三年五月廿一日開版 | あみだきょうはんぎ・ほけきょうはんぎ・こんごうじゅみょうだらにきょうはんぎ | 5枚 | 三原市八幡町宮内 | 昭60.6.6 | 板，桜材 | 縦25.0～27.0cm，横78.0～83.2cm | 鎌倉時代の嘉禎2年（1236）製作の板木。阿弥陀経は「四紙経」と呼ばれるが，両面彫り二枚で全文を刻んである。「嘉禎二年丙七月十六日始之，同歳八月十七日畢，願主安那定親」の刊記がある。巻首に「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」とあり，刊記は「嘉禎二年申九月十八日始十一月廿二日畢，但為法界衆生並父母，願主口口氏」とある。巻首に「仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経」とあり，刊記には「嘉禎三年丁酉五月廿一日，願主定親」とある。安那定親は嘉禄年間（1225～1227）にも春日版大般若経を刷り写したとされる人物。<br>　この三種の板木は，最古の地方版として存在価値があり刊行年代が明確，板木そのものが伝存していることから印刷史上貴重な資料であるといえる。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫（0848-65-8652） |
| 国 | 史跡 | 御年代古墳 | みとしろこふん | | 三原市本郷町南方 | 昭8.4.13 | | | 沼田川に注ぐ尾原川の奥まった谷の南面する丘陵端に位置する。封土はあまり明瞭でないが，円墳と考えられる。内部主体は花こう岩の切石で築かれた整美な横穴式石室で，後室，前室，羨道からなり，各室に花こう岩製の刳抜式家形石棺が納められている。全長10.7m，後室は長さ3.6m，幅1.9m，高さ2.2m，前室は長さ3m，幅2.2m，高さ2.2m，羨道は長さ4.1m，幅1.55m，高さ1.9mである。家形石棺はいずれも縄掛突起がなく，前室の壁の棟は幅広扁平である。出土遺物としては，金環，金銅製馬具，須恵器などがある。出土遺物や家形石棺などから，7世紀中頃の古墳とみられている。全国的にも注目される古墳である。 |  | |
| 国 | 史跡 | 小早川氏城跡<br>　高山城跡・新高山城跡・三原城跡 | こばやかわししろあと<br>　たかやまじょうあと<br>　にいたかやまじょうあと<br>　みはらじょうあと | | 三原市高坂町・本郷町・城町・館町 | 昭32.12.11<br>昭55.7.12（追加指定，一部解除）<br>平10.12.8（追加指定，名称変更） | | | 中世安芸南部の国人領主・小早川氏に関わる一連の城跡である。小早川氏の本拠であった高山城跡や，高山城から16世紀半ば頃に移った新高山城跡，中世末期（16世紀後半）に築城された近世城郭である三原城跡からなる。<br>　高山城：標高190mの山上は広大で，本丸・北の丸・太鼓の丸・千畳敷や裏木戸にあたる犬通しの石垣などがある。<br>　新高山城跡：高山城と沼田川を挟んでほぼ等高に位置し，小早川隆景が天正年間（1573～1591）に三原城を築いて移るまで本拠とした。山上には，本丸・東の丸・中の丸・西の丸などの郭や各所に石垣や土塁が残っている。東の丸と中の丸の間の低地の井戸郭には大小六つの大井戸跡が，山腹には菩提寺跡がある。<br>　三原城跡：小早川隆景が築いたもので海に向って舟入りを開き，城郭兼軍港としての機能を備えている。三原浦の南の海上にあった大島・小島を基盤として築造されたもので，既に天文年間（1532～1554）の末には三原要害が築かれ，永禄10年（1567）には本丸・二の丸・三の丸・舟入りなどが整備され，天正元年（1573）には隆景はこの城に前進して指揮をとっている。小早川氏の移封後も福島氏，浅野氏の支城となった。 | | 関連施設：三原市歴史民俗資料館（0848-62-5595） |
| 国 | 史跡 | 横見廃寺跡 | よこみはいじあと | | 三原市本郷町下北方字漆原窪 | 昭53.5.22 | | | 梨和川が沼田川に合流する地域の西北山麓端に位置し，北に山をおい南は低地に連続する。発掘調査で，講堂，塔，築地などの遺構が検出され，寺域は東西約100m，南北80m前後とみられる，講堂跡は寺域の東寄りに位置し，南北28.8m，東西19.2mの規模で，基壇化粧は平瓦をたて並べている。この基壇の南には回廊がとりつく。講堂の西北方には塔の遺構が検出され，西向きの特異な伽藍配置となる。瓦類は山田寺式単弁軒丸瓦や忍冬唐草文軒丸瓦などが多数出土している。遺構の下層から弥生時代終末（3世紀前半）の土器類が，多量に出土している。 | | |
| 国 | 天然記念物 | ナメクジウオ生息地 | なめくじうおせいそくち | | 三原市幸崎町有竜島南西能地堆 | 昭3.3.24 | | | ナメクジウオは扁平な紡錘形をしており，体色は淡桃色で，体長5cmぐらいである。原索動物門の頭索綱に属し，脊椎動物の原始形態をなすものとして，動物進化・発生学上貴重な研究資料とされている。この類は世界に約30種が知られているが，わが国では広く太平洋岸に生息する。そのうちでも瀬戸内海，三原水道の入口の有竜島（うりゅうとう）の南西に続く長さ約400mの砂浜は生息地である。ここは干潮時に一部もしくは全部を露出する海砂の浜からなり，ナメクジウオはその砂中に潜入，消息しているが，近時，生息数が激減している。 | | |
| 国 | 天然記念物 | 沼田西のエヒメアヤメ自生南限地帯 | ぬたにしのえひめあやめじせいなんげんちたい | | 三原市沼田西町松江 | 昭10.12.24<br>昭32.7.31（名称変更） | | | エヒメアヤメは高さ15～30cmの小型のアヤメ属の多年草で，毎年4月下旬頃にスミレ色の美しい花を開く。もともとエヒメアヤメは中国東北部・朝鮮半島に分布する植物として知られていたが，日本では愛媛県北条市腰折山で最初に発見されたのでこの名がつけられた。その後，佐賀・大分・宮崎・山口・広島・岡山の各県にも自生することが明らかになった。沼田西町の山林内の自生地は数ヵ所あるが，天然記念物に指定されている地域はその一ヵ所である。いずれもアカマツ林の疎林地で，陽当りのよい場所に多く見られる傾向がある。 | | |
| 国 | 天然記念物 | 久井・矢野の岩海 | くい・やののがんかい | | 三原市久井町吉田字船岩尻<br>府中市上下町矢野 | 昭39.6.27 | | | 久井町吉田の岩海は宇根山（標高698.8m）山塊の南側の山腹（標高480～570m）にある。傾斜の緩い3条の谷間に沿い，花こう閃緑岩の巨大な岩礫が長く帯状に連続累積し実に見事である。これは，塊状の基盤が気温変化などのため，その節理やヒビにそって剥離・破砕され，風化の進展とともに土壌化した部分は流れ去り，岩礫化したものが残ったものである。<br>　上下町矢野の岩海は矢野温泉の南方約1kmの一渓谷底（標高約450m）にある。閃雲花こう岩の巨大岩礫が重なり，谷底を埋め，その厚さは7m以上，延長70mに及ぶ。巨大な岩礫の間には，ミカドキクガシラコウモリが多く生息し，コウモリ岩として知られている。谷頭・稜線付近の基盤花こう岩がかつて崩壊転落し，風化の進展により礫化し土壌が洗い去られ巨大岩礫の残留累積したものである。 | | |
| 県 | 重要文化財（建造物） | 楽音寺本堂<br>附　有文墓碑銘石 | がくおんじほんどう | 1棟 | 三原市本郷町南方字堂之前 | 昭62.3.30 | 桁行三間，梁間三間，三面裳階付，寄棟造，本瓦葺 | | 安土桃山時代の慶長3年(1598)の建立である。方三間の堂の四方に後に裳階（もこし）をめぐらせていた。現在は背面の裳階は撤去されている。<br>　堂内の空間が非常に大きく，中世や近世の社寺建築ではあまり見られない特殊な技法が用いられているなど，戦国時代の地域的特徴が顕著な建物である。<br>　楽音寺は現在の国道2号線の南方丘陵裾に位置し，平安時代後期（12世紀）に開発領主・沼田氏が創建した古刹である。鎌倉時代（1192～1392）に小早川氏菩提寺となり18坊を数える大寺に発展したが，江戸時代初頭（17世紀前半）に寺領を没収され，衰微した。 | | |
| 県 | 重要文化財（建造物） | 極楽寺本堂 | ごくらくじほんどう | 1棟 | 三原市東町 | 平9.9.25 | 本堂／桁行七間，梁間五間，入母屋造，本瓦葺，背面錣葺 | | 江戸時代の元文7年（1737）頃の建立である。<br>　向拝（こうはい）を設けない，簡素で全体的に素朴な作りである。内陣を結界で仕切っているが，この結界が残っている例は極めて珍しい。<br>　極楽寺は浄土宗寺院である。 | | |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 重要文化財（絵画） | 絹本著色釈迦涅槃図 | けんぽんちゃくしょくしゃかねはんず | 1幅 | 三原市本郷町船木 | 昭49.4.25 | 絹本著色，軸装 | 縦157.7cm，横156.5cm | 室町時代後期（15世紀後半～16世紀）の作と思われる。軸金具は素文渡金（そもんときん）で、絹幅三幅と半幅を両端に継いだものを用い、絹本の織目はやや荒い。顔料の剥落は少ない。<br>永禄4年（1561）に毛利元就が，その子小早川隆景を高山城に訪ねた時，その宴に侍した蓮華尼に与えたものであるという。江戸時代の安永6年（1777）に表装替えが行われた。箱裏に墨書銘がある。<br>永福寺は小早川氏の祖・土肥茂平の菩提寺である。 | | |
| 県 | 重要文化財（絵画） | 紙本著色楽音寺縁起 | しほんちゃくしょくがくおんじえんぎ | 1巻 | 三原市本郷町南方<br>（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭50.4.8 | 紙本著色，巻子装 | 縦34.1cm，長さ1600.3cm | 天慶年間（938～946）藤原倫実が純友の乱の間に受けた護持仏薬師小像の霊験と恩に報いるため楽音寺を創建した経緯を，詞書と絵をつらね叙した絵巻物である。現存する絵巻は，江戸時代初期の寛文年間（1661～1673）浅野光晟によって原本を召し上げられたかわりに下付された模写である。奥書に「狩野右京藤原安信筆」とあり当時第一流の画家が往古縁起を忠実に模写したものとみとめられる。<br>この縁起は鎌倉時代（1192～1332）の原作品の写しとして，歴史的美術的価値は相当にあり，安芸国沼田荘や豪族沼田氏の起源を知るための好資料である。<br>楽音寺は本郷町南方に所在する真言宗寺院。沼田荘開発領主の沼田氏の氏寺として創建され，鎌倉時代以後は地頭・小早川氏の氏寺となった。盛時は18院の子院をもっていた。江戸時代初期，福島正則によって寺領が没収された。 | | 関連施設：広島県立歴史博物館（084-931-2513） |
| 県 | 重要文化財（絵画） | 紙本著色仏涅槃図 | しほんちゃくしょくぶつねはんず | 1幅 | 三原市本郷町南方<br>（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 平2.12.25 | 紙本著色，軸装 | 縦200.0cm，横190.0cm | 南北朝時代（1333～1392）の作。当初，墨の線だけで描かれていたが，至徳4年（1387）に彩色されたことが軸木銘から分かる。9段に62～64枚の紙を貼り継いで描かれているが，貼り継いだときに下になる側にも墨の輪郭線があり，画の下方から順に描いては継いでいったものと推測される。軸木に墨書銘があり，江戸時代後期までの修復の経過を知ることができる。<br>仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。沙羅双樹（さらそうじゅ）の下に横たわる釈迦を中心に，その死を悲しむ人や動物の姿が描かれている。紙本の涅槃図は珍しい。<br>楽音寺は，沼田荘開発領主・沼田氏の菩提寺として，平安時代（794～1191）に開かれたと言われる。鎌倉時代（1192～1332），小早川氏が沼田荘地頭となると，小早川氏の菩提寺となった。 | | |
| 県 | 重要文化財（絵画） | 含暉院障壁画　附　納め箱 | がんきいんしょうへきが　つけたり　おさめばこ | 29 幅 8枚（納め箱 1合） | 三原市高坂町<br>（福山市西町2-4-1 広島県立歴史博物館寄託） | 令7.1.9 | 障壁画：紙本墨画・紙本着色 掛幅装 29幅・マクリ8枚<br>納め箱：木造 被せ蓋 | 障壁画：竪 158.0～175.0 ㎝、横 87.6～131.0 ㎝<br>納め箱：竪 195.5cm、横 143.5cm、高さ 13.0cm | 佛通寺含暉院（三原市）の庫裡（くり）・客殿は、小早川隆景により慶長元年～2年（1596～97）にかけて修築され、本絵画のほとんどがその修築の際に納められた襖絵と考えられる。寺伝によると「雪舟筆」とされ、現在は掛幅装 29 幅及びマクリ8枚となっている。文化 11 年（1814）に広島藩主・浅野斉賢（なりかた）により調製された本絵画の納め箱の蓋裏には、襖絵を良好に保存するため襖から剥がして裏打ちを施したことや、襖の配置図などがも記 されており、本絵画の伝来状況が窺える。本絵画は、これまでの調査研究により、作風や伝来状況などから雲谷等顔（ うんこくとうがん）の作品とみな されている。代々毛利氏の御用絵師を勤めた雲谷派の祖である等顔は、雪舟の画風を継承 し、室町時代と近世をつなぐ水墨画の名手とされる。本絵画は、筆触の柔らかさや、淡く 金泥をはいた幽遠な空間描出などに優れた画技が認められるとともに、室町時代の古様な 水墨山水図の様式や、等顔が学んだ狩野派の要素も見られ、等顔の初期様式を示す作品と 評価されている。以上より、本絵画は、製作優秀であることに加え、雲谷等顔の初期作として絵画史研究 上の基準作となり得ること、地方に残る 16 世紀末に遡る障壁画として、一連の作品がほぼ 復元可能な形で伝わる貴重な作例であることから、本県の文化史及び絵画史上、特に重要 である。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造四天王立像 | もくぞうしてんのうりゅうぞう | 4躯 | 三原市本郷町南方 | 昭28.6.23 | 寄木造，玉眼 | 像高171cm | 東禅寺は，旧名葛沼（ひきぬ）寺といい，小早川氏の氏寺として相当の大寺であったが，雷火によって焼失し，現在は一堂を残すのみとなった。<br>四天王像は往時の盛運をしのぶに足りる力強い優作で，各々玉眼入り，多聞天（たもんてん）の首の柄と玉眼の押え木の墨書銘により，鎌倉時代の元徳2年（1330）6月17日に，源信成が往生極楽を願って造像したことが知られる。近くにある弁海神社旧蔵文書により，源信成は鎌倉時代末期（14世紀前半）に沼田庄梨羽（なしわ）郷弁海名の名主であったことが知られる。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造十一面観音座像 | もくぞうじゅういちめんかんのんざぞう | 1躯 | 三原市小泉町 | 昭28.8.11 | 寄木造 | 像高61cm | 龍泉寺の本尊で，端麗な面相の平安時代（794～1191）の作。十一面観音としては珍しい坐像である。脇侍の多聞天・不動明王も広島県重要文化財である。<br>龍泉寺は小早川氏一族の小泉氏の氏寺で，標高340mの山上にある。当初は真言宗であったが，現在は曹洞宗になっている。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造多聞天立像 | もくぞうたもんてんりゅうぞう | 1躯 | 三原市小泉町 | 昭28.8.11 | 一木造 | 像高84cm | 龍泉寺十一面観音の脇侍。顔かたちの引き締まった秀作で平安時代（794～1191）の作品である。一木造のため割れを防いでいる。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造不動明王立像 | もくぞうふどうみょうおうりゅうぞう | 1躯 | 三原市小泉町 | 昭28.8.11 | 一木造，背刳りあり | 像高85cm | 龍泉寺十一面観音の脇侍。長身で腰の張りが細く柔らかい感じのする平安時代（794～1191）の作。一木造のため割れを防いでいる。 | | |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造日光菩薩立像 | もくぞうにっこうぼさつりゅうぞう | 1躯 | 三原市小坂町善根寺薬師堂 | 昭30.3.30 | 一木造，背刳りあり | 像高166cm | 善根寺仏像収蔵庫は，古仏像三十数体を所蔵する。これらはおそらく廃絶した大寺の遺物であろう。『芸藩通志』によると「本徳山と称し，稲村山故城主田坂右馬允義忠が，祈願所なりしという」とある。<br>この像は木造月光菩薩像とともに，この薬師堂の本尊脇侍で，背刳(せぐり)がある平安時代(794～1191)の作である。 | | 関連施設:善根寺収蔵庫<br>(三原市教育委員会文化課<br>文化財係　0848-64-9234、善根寺保存会会長　早川正樹<br>0848-66-2323) |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造月光菩薩立像 | もくぞうがっこうぼさつりゅうぞう | 1躯 | 三原市小坂町善根寺薬師堂 | 昭30.3.30 | 一木造，背刳りあり | 像高166cm | 善根寺仏像収蔵庫は，古仏像三十数体を所蔵する。これらはおそらく廃絶した大寺の遺物であろう。『芸藩通志』によると「本徳山と称し，稲村山故城主田坂右馬允義忠が，祈願所なりしという」とある。<br>本像は木造日光菩薩像とともに，この薬師堂の本尊脇侍で，背刳り(せぐり)がある平安時代(794～1191)の作である。 | | 関連施設:善根寺収蔵庫<br>(三原市教育委員会文化課<br>文化財係　0848-64-9234、善根寺保存会会長　早川正樹<br>0848-66-2323) |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造吉祥天立像 | もくぞうきっしょうてんりゅうぞう | 1躯 | 三原市小坂町善根寺薬師堂 | 昭30.3.30 | 一木造 | 像高153cm | 善根寺仏像収蔵庫にある古仏像群三十数体のうちのすぐれた仏像のひとつで，吉祥天は神像風の髪形をした古様な像であり，福徳を司る女神として古くから恭敬されている。<br>本像は，背刳り(せぐり)があり割れを防ぐ手だてを講じている。平安時代初期(9世紀)の作である。 | | 関連施設:善根寺収蔵庫<br>(三原市教育委員会文化課<br>文化財係　0848-64-9234、善根寺保存会会長　早川正樹<br>0848-66-2323) |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造天部立像 | もくぞうてんぶりゅうぞう | 1躯 | 三原市小坂町善根寺薬師堂 | 昭30.3.30 | 一木造，背刳りあり | 像高135cm | 善根寺仏像収蔵庫にある古仏像群三十数体のうちのすぐれた仏像のひとつである。腐朽しており持ち物を欠失しているため像名を明確にできないが，平安時代初期(9世紀)の作である。 | | 関連施設:善根寺収蔵庫<br>(三原市教育委員会文化課<br>文化財係　0848-64-9234、善根寺保存会会長　早川正樹<br>0848-66-2323) |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造二十八部衆立像 | もくぞうにじゅうはちぶしゅうりゅうぞう | 13躯 | 三原市大和町平坂 | 昭38.11.4 | 檜材，寄木造，玉眼，彩色 | 像高48～52cm | 棲真寺(せいしんじ)は現在は小さな寺であるが，承久元年(1219)土肥実平・遠平父子が，源頼朝の娘であり遠平の妻であったと伝えられる妙仏尼の菩提のために建立したという小早川氏ゆかりの寺である。<br>二十八部衆像は檜製の玉眼入りで彩色されており，小型ながら木目を生かした写実的な入念の作で，28躯が完存していないのが惜しまれる。鎌倉時代(1192～1332)の作である。<br>なお現存するのは，密迹金剛力士(みつしゃこんごうりきし)，摩醯首羅王(まけいしゅらおう)，金毘羅王(こんびらおう)，満善車王(まんぜんしゃおう)，帝釈天(たいしゃくてん)，毘楼博叉天王(びるばくしゃてんのう)，金色孔雀王(こんじきくじゃくおう)，散旨大将(さんしたいしょう)，沙迦羅龍王(さからりゅうおう)，阿修羅王(あしゅらおう)，乾闥婆王(けんだつばおう)，迦楼羅王(かるらおう)，大梵天王(だいぼんてんのう)の13躯である。 | | |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造阿弥陀如来立像 | もくぞうあみだにょらいりゅうぞう | 1躯 | 三原市西町 | 昭42.5.8 | 寄木造，半眼の玉眼 | 像高77.5cm | 衣は通肩(つうけん)に懸け，袈裟の環は金具をもって作る。衣文は流麗な写実風にしかも鋭さを個ばせ，いわゆる安阿弥流(あんあみりゅう)といわれる容姿を思わせる。袈裟は金泥にて繊細な卍クズシの文様と唐草文を施している。保存は良好で，左足のほぞに「巧匠口口口」と墨痕を残している。台座は後補で，もと胎内にあったという「慶長七年六月一七日」の墨書銘がある法名連記の矩形の料紙を添えているが，慶長7年(1602)に修理をし，これを納めたと思われる。写実的作風，面貌の表現は鎌倉時代末期(14世紀前半)，あるいはそれをあまり下らない作と思われ，西国寺(尾道市)の釈迦如来をしのばせるものがある。 | | |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造四天王立像 | もくぞうしてんのうりゅうぞう | 4躯 | 三原市小坂町善根寺薬師堂 | 昭45.5.14 | 一木造 | 像高／伝持国天立像155cm，伝増長天立像190cm，伝広目天立像155cm，伝多聞天立像166cm | 四像とも檜材の一木造で，各像ともに腹部の天衣(てんね)に翻波(ほんぱ)式の彫法が見られる。天邪鬼(あまのじゃく)を踏んで立つ伝増長天(ぞうちょうてん)像の腹部及び背部には，寄木造の初期的段階を示すものかと思われる手法が見られる。各像の台座はともに後補。廃寺の御堂に保存されていたためか，欠損し易い部分は当初のものではなく補修されているものが多い。平安時代中期(10～11世紀)の作である。 | | 関連施設:善根寺収蔵庫<br>(三原市教育委員会文化課<br>文化財係　0848-64-9234、善根寺保存会会長　早川正樹<br>0848-66-2323) |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造兜跋毘沙門天立像 | もくぞうとばつびしゃもんてんりゅうぞう | 1躯 | 三原市小坂町善根寺薬師堂 | 昭45.5.14 | 一木造 | 像高170cm(台座を含む) | 兜跋毘沙門天については，唐の玄宗皇帝の時代(8世紀前半)，安西城が敵軍に包囲された時，城の楼門に兜跋毘沙門天が出現して敵を追い払ったという伝承があり，そのため都城の楼門に置くならわしがあったためかその作例は少なく，県内にはほとんどない。<br>本像は台座まで一木で彫成して，腹部の天衣(てんね)に翻波(ほんぱ)式の彫法が見られる平安時代前半(9～10世紀)の作品と見られるが，両肩から手先まで，持物など後補の部分が多く，顔面を彫成しなおしているのは惜しまれる。 | | 関連施設:善根寺収蔵庫<br>(三原市教育委員会文化課<br>文化財係　0848-64-9234、善根寺保存会会長　早川正樹<br>0848-66-2323) |
| 県 | 重要文化財(彫刻) | 木造男神坐像 | もくぞうだんしんざぞう | 1躯 | 三原市八幡町宮内 | 昭45.5.14 | 檜材，一木造 | 像高89cm，腹部の幅51cm | 神像は，神仏習合思想の中で，仏像の影響を受けて作られ始めたものである。神像が製作された文献上最古例のものは天平宝字7年(763)であるが，現存するのは平安時代初期(9世紀)のものである。<br>本像もヒノキ製の平安時代(794～1191)の作である。社伝では藤原百川(ももかわ)像という。唇に朱色を，口髭などは繊細な墨線をほぼ当初のまま残している。両手先及び膝，それに冠の前部を欠失しているのは惜しまれる。 | | 関連施設:御調八幡宮宝物収蔵庫<br>(0848-65-8652) |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 磨崖和霊石地蔵 | まがいわれいしじぞう | 1躯 | 三原市鷲浦町向田浦字地蔵脇 | 昭50.4.8 | 磨崖式半肉彫り | 石の高さ2.8m，厚さ4m，幅5m，坐像の高さ96cm，膝張85cm | 波打際の花崗岩に彫刻された磨崖式半肉彫の像で，頭部のうしろに円光背（えんこうはい）を浮き彫りにし，衣を通肩（つうけん）に胸に瓔珞かけ，蓮台上に結跏（けっか）している。右手に錫杖（しゃくじょう），左手に宝珠をのせている。像の左右には花瓶を浮き彫りにし刻銘があるが，潮と風雨にさらされて銘文は判読しにくくなっている。他の石碑に移刻された銘文によると，「于時正安二庚子年九月日大願主敬位平朝臣茂盛　幹縁道俗都合七〇余人　仏師念心」とあり，造立の縁故を知りうる。なお，正安2年は西暦1300年にあたる。<br><br>※瓔珞（ようらく）…珠玉をつづった首飾り | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造宝冠阿弥陀仏坐像 | もくぞうほうかんあみだぶつざぞう | 1躯 | 三原市本郷町南方字貞丸 | 平7.1.23 | 一木造，背割 | 像高110.0cm | この像は，頭の天冠台上に五面筒形の宝冠をかむり，身に朱衣を通肩（つうけん）にまとい，両手の掌を膝前で重ねる印相を示し，結跏趺座（けっかふざ）する相になっている。基本構造は，わずかに背割（せぐり）を入れるのみの完全な一木造で，材はカヤ材と推定される。様式的特色から平安時代前期（10世紀前半）の作と考えられ，備後・安芸地方の平安時代（794～1191）の地方信仰を考えて行く時に，重要な資料である。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造行道面<br>附　菩薩面頭部　1頭，宝冠残闕　2枚，幡竿付竜頭　1本，■　1個，鼓　1個，鼓胴　1個，蓮華　1本 | もくぞうぎょうどうめん | 8面 | 三原市沼田東町納所 | 平15.4.21 | | | 鎌倉時代後半，14世紀頃の製作と推定されている面。仏教行事のひとつ「行道」において使用されていた。<br>保存状態もよく，本県の歴史と文化を語るうえで貴重な資料である。<br>菩薩面を演じる役者が冠る木造頭部や，菩薩面に打ち付けられていた皮革製宝冠の残闕をはじめ，行道で用いられていた幡竿付竜頭，鼗(ふりつづみ)，鼓，鼓胴（奚婁けいろう），蓮華なども残されている。<br><br>※行道　極楽世界の聖衆来迎を現世で演じてみせる仏教行事。「練供養（ねりくよう）」，「迎講（むかえこう）」又は「迎接会（ぎょうじょうえ）」とも呼ばれる。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造佛通禅師坐像 | もくぞうぶっつうぜんじざぞう | 1躯 | 三原市高坂町許山 | 平16.2.26 | ヒノキ材，寄木造，玉眼嵌入，彩色 | 総高112.8cm，坐高74.3cm，膝張68.1cm，膝奥49.5cm | 室町時代の応永32年（1425）に，京都の高辻富小路（たかつじとみのこうじ）の仏師「大夫法眼」が制作した頂相彫刻（ちんぞうちょうこく）。頚部に墨書銘がある。ヒノキの寄木造である。<br>肉体把握や衣文表現は巧みで質感があり，生気と力強さを感じさせる。彫刻史上の基準作例であるとともに，本県の歴史と文化を語るうえで重要な資料である。<br>現在は，木造大通禅師坐像とともに，佛通寺含暉院開山堂（ぶっつうじがんきいんかいざんどう）に安置されている。<br><br>※佛通禅師　即休契了（しっきゅうけいりょう）の諡号。即休契了（1269～1351）は中国・元の禅僧で，佛通寺を開いた愚中周及（ぐちゅうしゅうきゅう）の師であった。 | | |
| 県 | 重要文化財（彫刻） | 木造大通禅師坐像 | もくぞうだいつうぜんじざぞう | 1躯 | 三原市高坂町許山 | 平16.2.26 | 寄木造，玉眼嵌入，彩色 | 総高113.0cm，坐高73.8cm，膝張66.7cm，膝奥49.5cm | 室町時代の15世紀中頃に製作されたと推定される頂相彫刻（ちんぞうちょうこく）。現在は，木造佛通禅師坐像と並んで佛通寺含暉院開山堂（がんきいんかいざんどう）に安置されている。<br>寄木造である。木造佛通禅師坐像と比べ，衣文表現などにやや硬さがみられ，木造佛通禅師坐像より後れての製作と考えられている。<br>本県の頂相彫刻を代表する作品のひとつである。<br><br>※大通禅師　愚中周及（ぐちゅうしゅうきゅう）の諡号（しごう）。愚中周及（1323～1409）は室町時代の禅僧で，中国に渡り佛通禅師の教えを受けた。帰国後，応永4年（1397）小早川春平の懇請を受けて佛通寺を開いた。 | | |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書宝治二年二月領家下文他十二通 | しほんぼくしょほうじにねんにがつりょうけくだしぶみほかじゅうにつう | 1巻 | 三原市本郷町南方（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭29.1.26 | 紙本墨書，巻子装 | | 豊田郡本郷町の楽音寺文書6巻のなかの1巻。楽音寺文書は計56通で，うち54通が県指定である。文政2年（1819）巻子装にまとめられた。<br>この巻子は，12通の文書を1巻にまとめたもので，宝治2年（1248）楽音寺の支配下にあった墓沼寺（ひきぬでら）領乃力名（のうりきみょう）の万雑公事（まんぞうくじ，荘園内の雑税）を免除し墓沼寺の修理にあてることを命じた領家下文をはじめ，弘安11年（1288）4月の沼田庄雑掌と地頭の争論を載した関東下知状の案文，天正18年（1590）毛利氏惣国検地にあたって楽音寺境内の守護不入を確認した毛利氏検地奉行人連署状などが含まれる。<br>楽音寺は豊田郡本郷町にある真言宗の古刹である。沼田荘の開発領主・沼田氏が平安時代（794～1191）に創建した寺で，源平の争乱後地頭として入部した土肥遠平が氏寺とした。 |  | 関連施設：広島県立歴史博物館<br>（084-931-2513） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書正応三年四月比丘尼浄蓮寄進状他十一通 | しほんぼくしょしょうおうさんねんしがつびくにじょうれんきしんじょうほかじゅいっつう | 1巻 | 三原市本郷町南方（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭29.1.26 | 紙本墨書，巻子装 | | 楽音寺文書6巻のなかの1巻。<br>小早川茂平の娘地頭尼浄蓮が鎌倉の将軍家や自身及び子孫の菩提を弔うため，三重宝塔建立助成田を寄附した正応3年（1290）4月の寄進状など，鎌倉時代から安土桃山時代（12世紀末～17世紀初め）にかけての小早川氏や毛利氏による土地寄附や宛行（あてがい）に関する文書がまとめられている。<br>楽音寺は，沼田氏が創建した寺で，源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は，寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。 | | 関連施設：広島県立歴史博物館<br>（084-931-2513） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書天正十二年五月仁和寺法親王令旨他十三通 | しほんぼくしょてんしょうじゅうにねんごがつにんなじほっしんのうりょうじほかじゅうさんつう | 1巻 | 三原市本郷町南方（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭29.1.26 | 紙本墨書，巻子装 | | 楽音寺文書6巻のなかの1巻。<br>仁和寺門跡仁助法親王が西国下向の途中楽音寺で宿泊接待をうけたことを感謝し塔頭のひとつに院号を与えた天正12年（1584）5月の2通の令旨をはじめ，南北朝時代の永和5年(1379)から明徳4年（1393）にかけての時期の院主職関係の文書や室町時代（1333～1572）の役負担に関する小早川氏の文書など13通がまとめられている。<br>楽音寺は，沼田氏が創建した寺で，源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は，寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。 | | 関連施設：広島県立歴史博物館<br>（084-931-2513） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書弘安四年正月領家下文他十一通 | しほんぼくしょこうあんよねんしょうがつりょうけくだしぶみほかじゅういっつう | 1巻 | 三原市本郷町南方（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭29.1.26 | 紙本墨書，巻子装 | | 楽音寺文書6巻のなかの1巻。<br>弘安4年（1281）正月の沼田庄領家下文をはじめ，楽音寺への土地寄進や役免除に関する鎌倉時代から室町時代（永享12年（1440））までの文書11通がまとめられている。<br>楽音寺は，沼田氏が創建した寺で，源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は，寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。 |  | 関連施設：広島県立歴史博物館<br>（084-931-2513） |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書慶長五年五月毛利輝元寺領寄進状他一通 | しほんぼくしょけいちょうごねんごがつもうりてるもとじりょうきしんじょうほかいっつう | 1巻 | 三原市本郷町南方<br>（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭29.1.26 | 紙本墨書，軸装 | | 楽音寺文書の中の1巻。<br>慶長5年（1600）4月付けの毛利輝元の楽音寺領寄進状写しや梨子羽郷南方（豊田郡本郷町南方）の楽音寺領を一筆毎に列記して渡した奉行人連署打渡状など3通でまとめられているが，寄進状などの江戸時代の写し2通は対象外である。<br>楽音寺は，沼田氏が創建した寺で，源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は，寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。 | | 関連施設：広島県立歴史博物館<br>（084-931-2513） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書慶長元年検地帳 | しほんぼくしょけいちょうがんねんけんちちょう | 1巻 | 三原市本郷町南方<br>（福山市西町二丁目　広島県立歴史博物館寄託） | 昭29.1.26 | 紙本墨書，巻子装 | 本紙縦31.9cm，横637.5cm | 楽音寺文書6巻の内の1巻。<br>慶長元年（1596）毛利氏の堺国検地の一環として行われた楽音寺法持院領分の検地帳。田畠屋敷一筆ごとに地名・面積・年貢収納高・耕作者（所有者）名が記されている。現状は巻子装に改装されている。<br>楽音寺は平安時代（794～1191）に沼田庄の開発領主・沼田氏が創建した寺で，法持院はその18の塔頭の一つである。源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は，寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。 | | 関連施設：広島県立歴史博物館<br>（084-931-2513） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書啓迪集 | しほんぼくしょけいてきしゅう | 8冊 | 三原市円一町 | 昭30.1.31 | 紙本墨書，冊子装 | 縦27.1cm，横20.9cm | 日本医学史上に画期的な功績を残した曲直瀬道三（まなせどうさん，1507～1595）（正盛）が天正2年（1574）に脱稿した道三医学の集大成本で，勅命によって僧策彦（さくげん）が題辞を認め，医学全般にわたり論述されている。<br>天正11年（1583）小早川隆景の侍医・水野松林軒に贈ったことが自筆奥書によって知られる。永禄年間（1558～1570），毛利元就が出雲出征中に病になったとき，道三は将軍足利義輝の命で出雲に下向してこれを治癒して以来，毛利氏一族の知遇を得ており，その縁でこの本を隆景の侍医に贈ったのであろう。<br>この啓迪集の刊本はなく，現存を確認できる自筆本は他に一書しかない。 | | |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書出三蔵記集録上巻第二<br>「文永十二歳萩原之郷於斗山寺書写之奥書あり」<br>附　紙本墨書広弘明集（断簡）　1巻 | しほんぼくしょしゅつさんぞうきしゅうろく　じょうかんだいに | 1巻 | 三原市八幡町宮内 | 昭38.4.27 | 紙本墨書 | 縦25.4cm，横1190.9cm | 文永12年（1275）頃に斗山寺（賀茂郡大和町萩原に跡がある）において行われた一切経書写の一部と思われる。鎌倉時代（13～14世紀前半）における地方仏教史を研究するうえで貴重な資料である。<br>出三蔵記集録とは，梁の僧祐撰の漢訳大蔵経の目録で，記録目録としては最古の仏教史上貴重なものである。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫<br>（0848-65-8652） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紺紙金字大般若経 | こんしきんでいだいはんにょきょう | 1巻 | 三原市八幡町宮内 | 昭42.5.8 | 紺紙金泥経，巻子装 | 縦24cm，横510cm | 平安時代（794～1191）の装飾経。大般若波羅蜜多経（だいはんにゃはらみたきょう）600巻の内の第591にあたる「第十五静慮波羅蜜多分之一」である。紺紙に金泥（きんでい）をもって一行16字から18字よりなり，経巻中の脱字は朱で加筆されている。見返しには金泥で三尊仏が描かれているが，奥書はない。<br>江戸時代後期（18世紀後半～19世紀前半）の三原の学者・青木充延が著した「備後八幡雑記」には，「文化八辛未正月七日青木充延奉納」とあり，文化8年（1811）青木充延が神宮寺を経て御調八幡宮へ納められたことが分かる。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫<br>（0848-65-8652） |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紙本墨書大般若経<br>附　11巻 | しほんぼくしょだいはんにゃきょう | 570巻 | 三原市久井町江木宮の本 | 昭42.5.8 | 紙本墨書，折本 | | 室町時代の応永13～17年（1406～1410）の間に書写されたもので，各巻奥書に執筆者名と，応永17年11月22日僧清篤が大願主兵衛三郎宗義並びに女，また一部は村上義興を施主として伊予国大浜八幡宮（愛媛県今治市大浜）に奉納した旨が記されている。執筆者は清篤が最も多く（253冊書写），その他29人の人名がみられる。そのうち聖純（28冊書写）は讃岐国豊田郡坂本郷隨田村柏木住の僧であることが知られる。<br>これらの経巻は天正13年（1585）8月小早川隆景が伊予の領主となったことによって，同年9月18日付をもって隆景から久井稲生神社に寄進されたものである。<br>版本5巻と寛延年間（1748～1750）同地千光寺と仏通寺において重複書写された6巻を含む。 | | |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 紺紙金泥細字法華経<br>附　木製漆塗六角経幢　1基 | こんしきんでいさいじほけきょう | 1巻 | 三原市高坂町許山 | 平9.5.19 | 巻子本 | 本紙／縦5.4～5.5cm，全長886.8cm<br>木製漆塗六角経幢／全高12.3cm，屋蓋幅7.5cm，基台幅7.2cm | 鎌倉時代の弘安6年（1283）の作。極めて小さい巻子（かんす）本で，紺紙上に金泥を用いた細字で法華経8巻28品分を一筆により1巻に書写している。小品であることから，祈願経か奉納経であったことがうかがえる。<br>附属する経幢（きょうどう）は六角形で，木製黒漆塗，一部稜線に朱漆を入れ，屋根頂部に漆箔おしの宝珠が載っている。 | | |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 佛通寺文書<br>紙本墨書47通，板版刻2枚，書冊7冊 | ぶっつうじもんじょ | 44点 | 三原市高坂町許山 | 平9.9.25 | | | 佛通寺に伝来した室町時代から江戸時代初頭（14～17世紀前半）にかけての古文書44点。<br>佛通寺の規式，小早川氏や毛利氏らの禁制，あるいは15世紀中頃の沼田小早川氏による佛通寺経営の実態など多様な内容を含み，学術的にも貴重な文書群である。<br>佛通寺は応永4年（1397）小早川春平が愚中周及を招いて創建した禅宗寺院である。 | | |
| 県 | 重要文化財（典籍） | 佛通寺正法院文書 | ぶっつうじしょうぼういんもんじょ | 10通 | 三原市高坂町許山 | 平9.9.25 | 真田則通売券<br>真田弘通売券<br>真田頼澄売券<br>小早川元平寄進状<br>小早川敬平安堵状<br>小早川敬平書状（切手）<br>佛通寺塔頭正法院領田地目録<br>小早川興平宛行状<br>小早川詮平安堵状（折紙）<br>毛利氏奉行人書状（切手） | （cm）<br>23.1×52.3<br>29.9×39.6<br>41.8×40.7<br>30.9×41.0<br>29.0×45.0<br>17.0×45.5<br>32.0×69.9<br>31.7×45.0<br>28.3×42.2<br>16.8×41.7 | 佛通寺の塔頭のひとつ・正法院に伝わる，室町時代の永享4年（1432）以後安土桃山時代（1573～1602）までの中世文書群。正法院領の形成が小早川氏の家臣であった真田氏によって行われたこと，小早川氏の庇護を受けていたことなどが記録されている。<br>点数は少ないが，佛通寺文書とあわせて，佛通寺の歴史を全体として捉えるうえで重要な資料である。 | | |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 重要文化財（典籍） | 東禅寺文書 | とうぜんじもんじょ | 18通 | 三原市本郷町 | 平21.4.23 | 紙本墨書 | | 東禅寺（元，墓沼寺（ひきぬでら））に伝来した鎌倉時代末期から室町時代にかけての文書（もんじょ）群（11通）と，ある時期に同寺に流入した弁海名（べんかいみょう）に関する文書群（7通）から成る。<br>前者は，沼田庄（ぬたのしょう）地域の政治や宗教の在り方を明らかにする上で貴重である。<br>後者は，記載地名が今日でも現地比定でき，弁海名の広がりや経営状況などを明らかにすることができる基本史料である。 | | |
| 県 | 重要文化財（考古資料） | 銅戈 | どうか | 1口 | 三原市八幡町宮内 | 昭38.4.27 | 青銅製 | 長さ37㎝<br>茎の長さ1.1㎝<br>区部の幅9.6㎝<br>紐かけの孔一辺1～1.2㎝ | 銅戈は本来柄（え）に対し，直角につけて用いる武器である。本品は中細形で他にあまり例がなく，北部九州で見られる鉄戈に近い形態をしている。この銅戈は両刃で，身に斜行する内ぎみの区（まち）と短い茎（なかご）からなり，鎬（しのぎ）は明瞭でなく樋（い）はない。鋒（むね）は丸味をおび鋭さに欠けており実用性に乏しく，儀器として用いられ，弥生時代中期（前1世紀～1世紀頃）頃のものと推定される。この銅戈は「天逆鉾」と言われて御調八幡宮宝物として伝えられ，青木充延の「備後八幡雑記」（文化13年（1816）著）では，同社北方の鉾ヶ峰から出土したと記述されている。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫<br>（0848-65-8652） |
| 県 | 重要文化財（歴史資料） | 金剛般若波羅密経版木 | こんごうはんにゃはらみつきょうはんぎ | 7枚 | 三原市高坂町許山 | 平9.5.19 | 桜材 | | 室町時代の長禄3年（1459）防州（山口県）祥雲寺で開版された版木。僧永賢によって佛通寺に寄進されたと伝えられる。7枚目には刊記と護法韋駄天神像が彫られている。<br>祥雲寺は佛通寺を本山とする十六派の寺院のひとつで，この版木は中世の地方出版文化を語るうえで重要な資料である。<br>金剛般若波羅蜜経は般若経典のひとつである。 | | |
| 県 | 重要文化財（歴史資料） | 延命地蔵菩薩経版木 | えんみょうじぞうぼさつきょうはんぎ | 2枚 | 三原市高坂町許山 | 平9.5.19 | 桜材 | | 戦国時代の文明10年（1478）開版の版木。2枚目裏に刊記と如意輪観音像が彫られている。中世出版文化の水準を示す貴重な資料である。<br>延命地蔵菩薩経は，地蔵菩薩の誓願・功徳を説く経典である。 | | |
| 県 | 史跡 | 兜山古墳 | かぶとやまこふん | | 三原市沼田東町字山崎 | 昭12.5.28 | 円墳 | 直径45m，高さ7m | 沼田川（ぬたがわ）下流右岸の標高67mの山頂に位置し，かつては湾奥の海に面した環境にあったと推定される。直径約45m，高さ7mの円墳で，北側に低い造出が存在すると言われるが明瞭でない。墳頂部と墳丘部に円筒埴輪がめぐらされ，斜面に葺石（ふきいし）が存在する。内部主体は未発掘のため不明であるが，墳丘裾付近で鉄手鎌，須恵器片などが採集されている。沼田川下流域の最大規模の円墳であり，5世紀中頃の古墳と推定される。<br>なお，古墳の南側約170mの同一丘陵には，家形埴輪などが出土した鳩岡古墳（径36.5m，高さ5.5mの円墳）や，古墳の北にのびる丘陵下手には横穴式石室があり，製塩土器などが採集されている。 | | |
| 県 | 史跡 | 棲真寺定ケ原石塔 | せいしんじじょうがはらせきとう | | 三原市大和町平坂字西ノ迫 | 昭15.11.10 | | | 棲真寺（せいしんじ）は，大和（だいわ）町内西南部の平坂地区の山中にあり，承久元年（1219）土肥実平（どひさねひら）・遠平（とおひら）父子が，遠平夫人（源頼朝の娘と伝える）妙仏を弔うために建てたという。弘安2年（1279）仏照禅師（白雲恵暁）が中興し，今日，鎌倉時代（1185～1332）の二十八部衆12体（県重文）が残されている。<br>定ヶ原の宝篋印塔（ほうきょういんとう）は，妙仏の母である寿庵尼（じゅうあんに）の墓と伝えられる。寿庵尼は，娘の妙仏の早世をいたみ，落髪して棲真寺に住み，安貞2年（1228）没したと伝えられる。石塔は高さ約1.5mで，鎌倉時代の様式をもつ。塔身を失ってはいるが，昭和39年（1964）の修理の際に新造追補している。 | | |
| 県 | 史跡 | 楢崎正員之墓及関係遺跡 | ならさきまさかずのはかおよびかんけいいせき | | 三原市西町，須波町 | 昭17.6.9 | 楢崎正員の墓，須波屋敷跡，須波波止場 | | 楢崎正員（まさかず）は，元和6年（1620），三原市西町のそろばん製造業を営む楢崎家に生まれ，家業に専念した。延宝元年（1673），54歳で京都に上り，山崎闇斎（やまさきあんさい）の門に学び，学の奥義を究めて帰郷し，三原城主浅野忠義（あさのただよし）の知遇をえた。元禄9年（1696）に77歳で没し，大善寺に葬る。翁は晩年須波に隠居したが，この地の東風の強いのをみかね，私財を投じて波塘（はと）を築き，海運の便をはかった。今日その遺跡は翁の善功を伝えている。墓所，屋敷跡，波止が指定されている。 | | |
| 県 | 史跡 | 小早川隆景墓 | こばやかわたかかげはか | | 三原市沼田東町納所字米山 | 昭18.3.26 | 宝篋印塔 | 高さ1.75m | 小早川隆景は，天文2年（1533）毛利元就（もうりもとなり）の三男に生まれ，安芸の国人領主竹原小早川家に養子に入った。やがて天文19年（1550），沼田（ぬた）小早川家を継ぎ，兄の吉川元春（きっかわもとはる）とともに毛利両川（りょうせん）体制の一翼を担った。新高山城（にいたかやま）・三原城は隆景が築城・修築したものである。慶長2年（1597），65歳で没し，米山寺にある小早川氏歴代の墓地に葬られた。墓は高さ1.75mの宝篋印塔（ほうきょういんとう）である。米山寺ははじめ巨真山寺（こしんさんじ）と呼ばれ，嘉禎元年（1235）に小早川氏の氏寺として創建された寺院である。 | | |
| 県 | 史跡 | 貞丸古墳 | さだまるこふん | | 三原市本郷町南方字貞丸，字二本松 | 昭24.10.28 | 円墳（横穴式石室） | 玄室／奥行4.93m，高さ2.15m，<br>家形石棺／長さ2.15m，幅1.15m，刳抜式 | 御年代古墳（史跡）の西南約500mの丘陵斜面に南面して築かれた円墳で，横穴式石室を内部主体とする。石室は羨道部が大きく破壊されており，玄室部の長さ4.37～4.93m，幅2.09m，高さ2.15mが残る。しかし，南端の両側の石が柱状に立てられ，それに鴨居状の石がわたされているところからすると，その先は羨道（せんどう）ではなく前室となる可能性もある。玄室内には，長さ2.15m，幅1.15m，高さ60mの凝灰岩製の刳抜式（くりぬきしき）家形石棺の身がおかれている。蓋の所在はあきらかでない。この凝灰岩製家形石棺は，兵庫県高砂市付近に産出する竜山石で，播磨から運びこまれたとみられている。7世紀前半頃の古墳と推定される。 | | |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 史跡 | 梅木平古墳 | ばいきひらこふん | | 三原市本郷町下北方字梅木平 | 昭24.10.28<br>平24.1.26<br>（追加指定，名称変更） | 7世紀初頭，横穴式石室 | 玄室／長さ13.25m，幅3.02m，高さ4.2m | 本郷町の沼田川中流にそそぐ梨和川・尾原川の狭い谷間には，家形石棺などを納める特色ある横穴式石室墳が分布し，梅木平古墳はその東端の南面した丘陵端に位置する。墳丘は周辺が畑となり，規模は不明であるが円墳と思われる。県内では最大規模の横穴式石室を内部主体とし，現存の全長13.25m，奥壁幅3.02m，高さ4.21mで，入口部分が破損しているので，もう少し長くなろう。両袖式の石室で，玄室と羨道部の天井部の高さの差が著しい。7世紀初頭前後の古墳と推定される。墳丘の小堂には平安時代（794～1184）の仏像2体が安置され，古墳の東約200mには，白鳳時代（7世紀後半）の寺院跡である横見廃寺跡（史跡）がある。 | | |
| 県 | 史跡 | 貞丸第二号古墳 | さだまるだいにごうこふん | | 三原市本郷町南方字貞丸 | 昭25.9.16 | 円墳（横穴式石室） | 石室／長さ5.1m，幅2.1m，高さ1.97m | 貞丸古墳の北上手約20mの位置に，南面して築かれた円墳で，横穴式石室を内部主体とする。石室は羨道（せんどう）部が破壊されており，現存の長さ5.1m，幅2.12m，高さ1.97mで，石室の構造・規模・方向など貞丸古墳に共通するところが多い。内部に組合式（くみあわせしき）家形石棺が安置されていたといわれ，現在貞丸古墳の東にある石碑の台石に家形石棺の蓋が使用され，側石材も大日堂の踏石や墓地に散在する。石棺蓋には，本来六個の縄掛突起を有したものと推定される。石材は凝灰岩で，竜山石製と考えられる。7世紀前半の古墳と推定される。なお，貞丸古墳の南西方200mにある南方神社に，家形石棺の蓋石，底石，長側石などが存在するが，その出土地は明らかでない。 | | |
| 県 | 史跡 | 杭の牛市跡 | くいのうしいちあと | | 三原市久井町江木字亀甲山 | 昭41.12.8 | | | この牛市跡は，毎年9月，10月，11月の3回，市が開かれ数多くの牛馬が売買されていたところである。文献によれば，江戸時代初頭の延宝年間（1673～1681）の頃から市として確立されたものと言われる。近くには，牛馬宿と呼ばれる家も残っており，また，丘陵上には伯耆大仙神社の分霊と言われる大仙神社が祀られている。 | | |
| 県 | 史跡 | 黒谷古墳 | くろたにこふん | | 三原市大和町下草井 | 昭60.3.14 | 円墳（横穴式石室） | 現在長6.85m，奥壁幅上部1.4～1.6m，高さ2.2m | この古墳は，椋梨川によって開けた椋梨の平地から奥深く入った黒谷の東側小支谷にあり，前面には黒谷及び椋梨の耕地を臨むことができる。<br>墳丘は，開墾により削平された部分が多いが，径10m以上，高さ3.5mの円墳と推定されている。石室は羨道（せんどう）を一部破損しているが，南西に開口した横穴式石室である。この横穴式石室は，石室奥壁に接し，石室に直交して石棚を設けたもので，石室の平面形は凵の字状をなすが，石棚の上部では丁字状に近い。石室の現存長6.85m，奥壁幅1.4～1.6m，高さ約2.2mである。石棚は床面から1.3mの位置にある。<br>時期は，6世紀後半から7世紀前半と推定される。石棚を有する古墳は県内に例がなく，貴重である。平成11年（1999）には大和町により保存整備が行われた。 | | |
| 県 | 天然記念物 | 仏通寺のイヌマキ | ぶっつうじのいぬまき | | 三原市高坂町字伏龍窟 | 昭36.11.1 | | | イヌマキは本州中南部，四国，九州及び沖縄に分布し，数十年以前には，各地にその径1.0m以上の大木が生育していたようであるが，本樹のように樹高約20m，胸高幹囲3.52mの巨樹は極めて稀である。雌株で，短楕円状の樹冠を形成し，樹勢は極めて旺盛である。<br>なお，本樹は仏通寺開山の愚中周及禅師のお手植と伝えられている。 | | |
| 県 | 天然記念物 | 御調八幡宮の社叢 | みつきはちまんぐうのしゃそう | | 三原市八幡町宮内宮地側 | 昭45.1.30 | | | 本社叢は三原市北方の八幡山の東斜面，海抜260m～300mのところにあるシイを主とする社叢である。<br>広島県内では，沿岸部から海抜600mぐらいの山間部までの間は暖帯林の発達する地域で，常緑広葉樹が見られるが，大部分は破壊されたアカマツの二次林におきかえられているところが多い。本社叢の群落組成からみると，シイ林は，遷移の最終段階（極相）に達したものといえ，県内に残された数少ないシイ天然林の代表的なものである。 | | 関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫<br>（0848-65-8652） |
| 県 | 天然記念物 | 吉田のギンモクセイ | よしだのぎんもくせい | | 三原市久井町吉田 | 昭61.11.25 | | | ギンモクセイは，植物学的にはキンモクセイ，ウスギモクセイの母種として取り扱われている中国原産の常緑小高木である。葉には細かい鋸歯があり，白色の花をつける。<br>吉田のギンモクセイは樹高約12mで，樹の大きさから樹齢400年内外は経過していると推定される。ギンモクセイの大木は比較的少なく，全国的にも有数の老大木であると思われる。 | | |
| 県 | 天然記念物 | 莇原のオガタマノキ | あぞうばらのおがたまのき | | 三原市久井町莇原 | 昭61.11.25 | | | 本件のオガタマノキは，胸高幹囲1.97mで，現在知られている限りでは広島県内第1位の巨樹である。旧莇原村の割庄屋であった所有者の栗原家は，明治初年に起きた百姓一揆の際襲撃を受け，母屋が焼打ちされた。この時，このオガタマノキの母屋側の主幹部が焼けて損傷を受けたと伝えられているが，のち樹皮が再生して傷口をふさぎ，縦の亀裂となって過去に焼けた部分の痕跡をとどめている。百姓一揆の歴史の一断面を物語る証人としても意義が大きい。 | | |
| 県 | 有形民俗文化財 | 久井町の節句どろ人形 | くいちょうのせっくどろにんぎょう | 246点 | 三原市久井町江木　久井町民俗資料館 | 昭39.10.3 | 土製の人形 | | 旧久井町内で収集された土製の人形のコレクションで，江戸時代後期の文政年間（1818～1829）から大正10年(1921)頃までのものである。<br>明治20年(1887)頃から初節句を迎える子どもの将来を祝福するために親類や知人から土人形を贈与する慣習が盛んになったと言われる。<br>人形の生産地は三次，三原地方が多く，稀には遠く筑前博多，京都伏見のものなども見られ，産地によってそれぞれ特徴が見られる。信仰的なものでは天神，七福神，象徴的なものでは武将，烈女，美姫，風俗的な町娘などが主要なものである。<br>これらの節句人形のコレクションは人生儀礼及び年中行事に深いつながりがあり，一方民芸品としても地方の特色を有するもので，久井町を中心とした一時代の文化交流の様子がうかがえる貴重な資料というべきである。 | | 関連施設：久井歴史民俗資料館<br>（0847-32-7139） |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 県 | 無形民俗文化財 | ちんこんかん | ちんこんかん | | 三原市 | 昭34.10.30 | | | 一名「ちっこんかん」ともいい，当て字で「竹根幹」とも記すが，この名称はおそらく楽器の音による命名と思われる。8月16日に大須賀神社（通称「牛神社」）へ奉納される踊りである。全身に赤い衣装と鬼面をつけ，小さな破魔弓をもった大鬼と，六尺棒を手にした小鬼，それに大太鼓打ち，小太鼓打ち，鉦（かね）打ち等数十名で，各農家の前で踊りつつ，牛神社へ進む。神社境内では一つの太鼓を2，3人で跳躍しながら打ち，鉦（かね）を打ちなどして踊る。かつては当地方に行われていた雨乞おどりを現在に伝えるものと考えられる。 | | |
| 県 | 無形民俗文化財 | 稲生神社ぎおん祭のおどり | いなりじんじゃぎおんまつりのおどり | | 三原市久井町 | 昭36.4.18 | | | 久井町内の旧8か村が合同して，毎年7月，八重垣神社の例祭日に奉納させるものである。行事は武士行列・杖使い・おどり・獅子舞等の約140人からなり，大永4年（1524），江木高根城主山名氏がこの神社に参詣したとき，領民が奉納したことに由来するという。杖使いは雨乞い・虫送りのおどりで，子どもたち約40人が頭にシャグマをつけ，色紙をかざった竹棒を手にして円陣を作り，太鼓・鉦（かね）・ほら貝に合わせて「トンカラ」と「チャンカカ」の二種の踊りをおどる。踊り子は風流笠をかむり，小鼓をたたきながら，道びき，いさご，つぼね，花のおどり，宮島，なぞかけ，龍王，船節，引きあげなどの九種を大太鼓・鉦・ほら貝に合わせておどる。獅子舞には，ひょうきんじじいが伴い，ひょっとこ面をかぶり，ささらと福物を持ってもどき役をなす。<br>旧6月望(もち)の日を中心に行われ，御霊会(ごりょうえ)の信仰にともなった踊りで古い形式を残すものと思われる。 | | |
| 県 | 無形民俗文化財 | 御調八幡宮の花おどり | みつきはちまんぐうのはなおどり | | 三原市八幡町 | 昭40.10.29 | | | 三原市八幡町御調八幡宮の祭礼日に，5地区が交代で奉納する踊りである。道中払いの鬼を先頭にして武者行列を組み，道中を囃して神社にいたり，おどり子は円形となって，大太鼓，小太鼓，笛，手打鉦（てうちがね）の調子によっておどり，これに獅子舞がからむ。<br>久井町「稲生神社ぎおん祭のおどり」と同種のもので，同じように歴史も古い。もとは「ぎおん祭のおどり」と同様に「雨乞おどり」であったのを，桜花の多いころの地域民一同のレクリエーションとし，同時に名称も「花おどり」と改めたものであろう。<br>地域住民のほとんどが参加する大規模なおどりである。 | | |
| 県 | 無形民俗文化財 | 能地春祭のふとんだんじり | のうじはるまつりのふとんだんじり | | 三原市幸崎町 | 平7.9.21 | | | これは毎年3月の第三土曜日と翌日日曜日に常磐神社の春祭に行われる，山をふとん状に飾っただんじりが町内を練り歩くものである。<br>このような「ふとんだんじり」は県中央部の沿岸部及び島嶼部に残っているが，能地のこれは江戸時代中期（18世紀）から伝承され，だんじりの神幸がしっかりと残っていること，間に獅子舞を伴った太鼓（獅子太鼓）が演奏されるなど，民俗芸能として古い姿を残しており，四国地方北部の沿岸地域との文化交流を知る上で貴重なものである。 | | |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 南山資料館 | | 1棟 | 三原市幸崎町能地 | 平10.4.21 | 木造2階建，瓦葺，昭和初期建設 | 建築面積85㎡ | 木造二階建の診療所建築である。一階が診療施設，二階は接客空間とされていた。現在では一階部分を郷土出身の金工作家清水南山の資料館となっている。上部にアーチ窓を設ける正面中央の玄関が意匠上のアクセントで，洋風の建物として親しまれている。 | | |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 幾野家住宅主屋 | いくのけじゅうたくしゅおく | 1棟 | 三原市久井町和草 | 平11.10.14 | 木造平屋建，鉄板葺，明治16年（1883）建設 | 建築面積151㎡ | もと茅葺の農家建築であるが，施主が和草村の戸長を務めていた関係で，正面に式台玄関と，その左手に半間幅の濡れ縁をもつなど戸長役場としての性格を合わせ持つ。明治時代前期における地方行政機構の様子を知るうえで貴重な遺構である。 | | |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 旧大草尋常高等小学校奉安殿 | きゅうおおぐさじんじょうこうとうしょうがっこうほうあんでん | 1棟 | 三原市大和町大草 | 平23.1.26 | 石造平屋建，建築面積2.9㎡，基壇付 | | 小学校庭隅の石積基壇上に建ち、間口・七メートル奥行一・七メートル、石造である。切石布積の躯体前面にたつドリス式風の円柱で庇を受ける。隅反りのある屋根石上に宝珠状の頂石を載せ、四方に切妻の小屋根を置く。独特な形式になる石造奉安殿。 | | |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 佛通寺多宝塔 | ぶっつうじたほうとう | 1棟 | 三原市本郷町高山 | 平23.1.26 | 木造多宝塔，銅板葺，建築面積18㎡ | | 境内の高台に建ち，間口，奥行とも4.3m，三間多宝塔，銅板葺で，縁高欄をめぐらす。軸部は和様を基調とし，組物は下層出組，上層四手先とする。墓股等の細部に流麗な彫刻を施し，軒まわり部材に反りをもたせるなど整った塔姿をもつ近代の多宝塔。<br>昭和2年建設。 | | |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 眞田家住宅主屋 | さなだけじゅうたくおもや | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 木造2階建一部平屋建，瓦葺一部銅板葺 | 建築面積250㎡ | | | 大正前期／昭和38年・平成14年改修 |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 眞田家住宅奥座敷 | さなだけじゅうたくおくざしき | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 木造平屋建，瓦葺一部銅板葺 | 建築面積171㎡ | 眞田家は代々商家で近代以降は畳表販売業や薬種商販売業を営んだ。主屋は二階建て切妻造りで入母屋造り玄関を付す。敷地には，和様折衷の客間や，茶室など上質な接客空間を配し，山陽道に面して土蔵や表門を並べる。 | | 昭和3年／昭和38年増築 |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 眞田家住宅客間 | さなだけじゅうたくきゃくま | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 木造2階建一部平屋建，瓦葺一部銅板葺 | 建築面積109㎡ | | | 昭和3年 |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 眞田家住宅茶室 | さなだけじゅうたくちゃしつ | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 木造平屋建，瓦葺一部銅板葺 | 建築面積36㎡ | | | 昭和3年 |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 眞田家住宅土蔵 | さなだけじゅうたくどぞう | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 土蔵造2階建及び煉瓦造3階建，瓦葺，建築面積36㎡ | 建築面積36㎡ | | | 大正前期／昭和3年増築 |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 眞田家住宅表門 | さなだけじゅうたくおもてもん | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 木造，銅板葺 | 間口2.4m | | | 昭和3年／平成14年移築 |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 酔心山根本店事務所 | すいしんやまねほんてんじむしょ | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 木造2階建，瓦葺 | 建築面積266㎡ | 事務所は酒造業を営む長大な間口持つ町家で二階建て切妻造り本瓦葺き。一階に格子を建て二階に虫籠窓を開け，黒漆喰塗りで重厚に仕上げる。西脇に建つ土蔵とともに旧山陽道沿いの景観を形成する。 | | 明治35年／昭和5年増築・平成18年移築 |
| 国 | 登録有形文化財（建造物） | 酔心山根本店土蔵 | すいしんやまねほんてんどぞう | 1棟 | 三原市東町一丁目 | 令3.2.4 | 土蔵造2階建，瓦葺 | 建築面積53㎡ | | | 昭和5年／平成18年移築 |
| 国 | 登録有形文化財（記念物） | 船木氏庭園 | ふなきしていえん | | 三原市西町 | 平23.2.7 | 庭園 | 1,902.45㎡ | 江戸時代末期から近代に酒造業などの商業により財を成した川口氏の別邸で，茶室・数寄屋(すきや)建築の増改築に伴って順次造作が進んだ住宅の庭園。<br>建築群の北と東に広がる平場(ひらば)，その背景として敷地北辺から東半部にかけて複雑に展開する築山(つきやま)，両者を結んで縦横に打たれた飛石(とびいし)・延段(のべだん)・石段，要所に配置された蹲踞(つくばい)・手水鉢(ちょうずばち)・井戸・燈籠など，面積に比して景観構成・景物(けいぶつ)は多彩で変化に富む。<br>特に，築山は背面を2段の石垣で積み上げた高さ3mもの大規模なもので，石段付近の築山裾部には大きな景石(けいせき)を多用して見所のある景をつくり，頂部からの展望も意図された。<br>建築群の北端の五畳茶室は19世紀半ばの茶人であった不二庵(ふじあん)の造作とされるほか，敷地北西隅部に建つ物見櫓の初層床面には花文(はなもん)の敷瓦による装飾が見られるなど，庭園とともに建築の随所にも特質が見られる。<br>この時期における三原地方の庭園文化の一端を示す事例として意義深い。 | | |
| 国 | 記録記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 | 久井稲生神社の御当 | くいいなりじんじゃの | | 三原市久井町 | 昭和56年（1981）12月24日（選択） | | | 久井稲荷神社の御当は，久井稲荷神社の秋の例祭で行われる行事である。当日の行事の次第をみると，午前に祭典があり，これに引き続いて午後にまず神楽殿で見子【みこ】の当（社家社人の座）があり，次いで広庭で東座（もとの領家分の座）と西座（もとの地頭文の座）が行われる。東西の各座ともその年の当番主が各自の持つ御当田から撮れた新穀で醸造した甘酒と大鯛を献饌する。続いて「場の魚」と呼ばれる行事があり，下げ渡された大鯛を据え方が据え，包丁方が列座の中で，亀の入れ首等特色ある包丁さばきで古式通りに料理を行い，やがて直会となる。この行事は慶長三年（1598）年の「稲荷御当之覚」の記録とほぼ近い形で今日まで行われていることから，貴重な行事といえることから，早急に記録を作成する必要があるものである。 | | |